

# 循環と再生の思想——ホールネスの生成存在論

服部 英二

世界は人類なしで始まったし、人類なしで終わるだろう  
(クロード・レヴィ・ストロース)

はじめに——時のパラダイム

「もし人類が今の方向を変えないならば、地球はイースター島の運命を辿るであろう」

二〇一五年のパリ会議、COP21での議論を顧みるとき、ジャック・イヴ・クストー (Jacques-Yves Cousteau, 1910-1997) の残したこの言葉が実感をもって胸に突き刺さってくる。一七二二年の復活祭の日、この島がオランダ海軍によって発見されたとき、そこには数々の巨大なモアイが転がり、かつてはかなりの文明が栄えた形跡があったのだが、いまは一本の樹もない

裸の島となったその孤島に残っていたのは二〇〇人ほどの貧しい原住民であったのだ。この島を、他の探検家とは異なり海底まで探索したクストーは、その海が死んでいることを見出す。そして、この島の文明滅亡の原因をはっきりと言いつつ、「樹を伐ったからだ!」。この地球倫理の先達は、森・里・海を繋ぐ水の循環にのちの循環を見出していたのであった。

四五億年の地球史では過去に五回の生命大量絶滅が起こっている。そして今、第六回目の大量絶滅がささやかれるに至った。この第六回目の大量絶滅はそれまでとその本質を異にしている。これまでの絶滅が隕石の衝突等の自然災害であったのに対し、今起ころうとしているのは、ホモ・サピエンスという一つの生物種による母なる地球の破壊という自殺的犯罪行為による、という点だ。「人類は母なる地球を殺そうとしているのだ

ムンクの *Scream* は、「叫び」よりも「悲鳴」

図 1

て直線的に流れているとの考えは、現在日本人を含むほぼすべての民族の共有する paradigm 「思考の枠組み」となっている。しかしそのパラダイムは果たして正しいのか？ 今我々が直面しているのは、本当は政治家達の念頭にある金融・経済危機ではなく、人類文明そのものの危機なのだ。今までの経済的成長は人間の成長とするパラダイムそのものが問い直されなくてはならない。

ムンク (Edvard Munch, 1863-1944) の「叫び」という絵が何故これだけ人を引き付けるのか？ 実はこの作品につけられた *Scream* という題は「悲鳴」と訳されるべきであった。ムンクはある時、海岸近くで地球の悲鳴を聞いたのだ。この絵の人物が叫んでいるのではない。彼は聞こえてきた母なる地球の悲鳴が恐ろしく、耳をふさいでいるのだ。

直進する時間は世界の時間なのか？

一九九三年、ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) が晩年を過ごしたスイスのロカルノで開かれた、トランスデイシプリナリー研究の方向付けに関するシンポジウムで私は次のように語った。

……『西遊記』は七世紀中国から仏典を求めて天竺に旅をした玄奘三蔵という僧の話ですが、従者の一人に孫悟空という猿がいました。彼は自分の超能力を師に見せようと、

ろうか？ 母殺しの罪を犯すものが生き延びることはあるまい」とはアーノルド・トインビー (Arnold Joseph Toynbee, 1889-1975) の言葉である。

問題の核心には「人権 Human Rights」という言葉と同様に、国連でも批判することが許されない「進歩 Progress」と「成長 Development」という言葉が隠されている。SDGs というときも、そのDは成長故、Sustainabilityを地球環境の維持と理解していない人が多い。未だ多くの国が経済的な右肩上がりグラフを人類の進歩と混同しているのだ。この進歩の概念の背景には直進する時間論がある。時間は過去から未来に向かっ

魘斗雲という魔法の雲に乗って一瞬のうちに千里を飛び、地の果てと思われるところに聳えていた山の中腹に自分の名を書き止めて帰ってきました。その自慢話を聞き終えた三蔵法師はおもむろにその掌を開いて見せたのです。すると何と孫悟空が地の果ての山に書いたはずの名は、その中指に書かれていたのです。つまり孫悟空の素晴らしい冒険も仏の掌を出していなかったのです。

これは中国の話ですが、同様なことがヨーロッパでも起こっているのです。ヘーゲル (Friedrich Hegel, 1770-1831) やマルクス (Karl Marx, 1818-1883) はそれまでのキリスト教神学を否定した歴史哲学を樹立したかに見えませんが、それらはやはり一つの掌を出していないことを知らねばなりません。その掌とはアウグステイヌス (Augustinus, 354-430) の『神の国』であります。そこでは時が一方向きをもって進みます。始めがあり、終わりがありません。この直線的な時間論は、ヘブライ・キリスト教の特徴なのですが、アウグステイヌスはそこに光と闇の闘争という、当時ローマ帝国にまで浸透していたマニ教の歴史観を取り入れています。マルクスはヘーゲルの〈世界精神〉を〈下部構造〉に置き換えますが、すべてはこの時間論のパラダイムの中の出来事に過ぎないのです。そして問題は「進歩 Progress」という近代的価値が、このパラダ

イムに立脚していることです。この時間論には科学の中にバラ色の未来があると信じて物質文明の進歩を推し進めてきた近代人が忘却していた重要な一点があるのです。それはこの直線の時間は無限に続くのではなく終わりがある、ということですが、それはヘブライズムに固有な「終末論 eschatology」なのです……

私の発表はその殆んどが欧米人であったこのシンポジウムの参加者から驚きをもって受け止められ、翌年パリの Le Mail 社から出版された『Home, la Science et la Nature』(『人間・科学そして自然』) という本に収録された。進歩の概念が立脚する直進する時間は地上の諸文明に普遍的なものではないことを指摘したからである。さらにそれは時間論ではふつう意識されていない領域、「人はどうあるべきか」という倫理と価値の問題を含むことの示唆でもあった。

私がここで言いたかったことは、殆どの人が現在も、なにも疑うことなく、過去から未来へと流れる時間を生きていると思っていることだ。その時間のなかに進歩と成長を求め、それがグローバルな認識となつて許容されているのではないのか。その進歩とは内的人間の進歩ではなく、物質文明の進歩に他ならないのだが、その二つは漠然と混同されている。しかしこの直線的時間論は世界のすべての文明の根底にあるのではなく、数ある文明の一つであるヘブライズム、すなわちユダヤ教・

キリスト教・イスラームが形造る一本の文明の樹に独特のものなのだとならねばならぬ、ということであった。それは超越神を持つ一神教の世界であり、ここでは、この世とは所詮仮の存在に過ぎないのだ。

二〇一六年、地球システム・倫理学会の学術大会で「日本人と『無』と題する基調講演を行った中西進（一九二九―）氏は、三島由紀夫（一九二五―一九七〇）の『豊穡の海』を取り上げ、そこに時の問題を見て取っている。中西氏は三島が衝撃の死を遂げたその直前に書き上げたこの大作の中で「枯れた海」である月の砂漠に何故豊穡を見たかを問い、そこには唯識論の阿頼耶識がある、と説く。三人の登場人物が三つの時を表す。ただ過行く「時の老化」を生きた本田、果たせぬ恋の末「時の転化」を生きた松枝、そして尼寺に入り「時の超越」に永遠の今を見出した聡子、である。この阿頼耶識において、時は「とこ」すなわち永遠でありうることを示した傑作である、という。

あくまでキリスト者であることを求めたキルケゴール（Søren Kierkegaard, 1813-1855）はその『瞬間』という著で時間と歴史の由来を語っている。「永遠が内在に関わった瞬間、歴史が始まった」と。その歴史は直進する。それがグロバールな認識となっているのだが、キルケゴールによれば、永遠が再び内在に関わる時、その歴史すなわち時間は終わるのである。

ヨハネの黙示録によれば、それはハルマゲドンとなる。そのあとキリストが再臨し、最後の審判が行われる。ここに見るその時間とは果てしない蒼穹を彗星が横切るイメージである。それは三八億年の生命の歴史から見ればまさに瞬時に過ぎない。

### 文化の多様性

イタリアのウンベルト・エーロ（Umberto Eco, 1932-2016）は一九九七年、スペイン・バレンシアでの来るべき三千年紀を語りあうシンポジウムで、こう述べた。

過去二〇〇〇年のシンボルは直進する飛矢のイメージであった。時は、一方性をもって突き進んだ。進歩という概念がそこから生まれた。それに対し来るべき三千年紀のシンボルは星座であらねばならない。それは多文化社会の尊重ということである。

文明が一元的ではなく多様であることの認識と互敬の大切さを説いたのだ。このシンポジウムでは更に多くの識者によって歴史哲学が内蔵する直線の時間論、そこから生まれたユートピアの理念が指摘された。私自身はここで「異文化間に通底する価値を求めて」と題する発表を行っている。「文化の多様性こそが命、という立場に立ちながら、もろもろの文化の深みには万人が分かち合える倫理的価値が見いだされるはずだ」と示唆し、「これまでの文化像にはひずみがあった。植民地主義のも

たらした最大の悲劇は、伝統を保持していた民族が、自らの伝統を破棄した民族によって精神的な隷属関係の置かれたことなのだ。遠近法的な世界史はこの精神によって書かれたものだと指摘した。その翌日、ドイツのハンス・キュング (Hans King, 1928-) が軌を一にする発表を行った。彼は「新世界秩序は新倫理秩序から生まれる」とし、各宗教が内蔵する「倫理」の次元でのコンセンサスの可能性を説いた。文化の多様性の上に立つ「エチカ・モンディアール」(Ethica Mondiale i.e. Global Ethics) が可能であると説いたチュービンゲン大学の神学者である。

コンパッションがキーワードである、というのがこのシンポジウムの結論であった。Pathos (痛み) を分かち合うのが Compassion である。単なる Sympathy (共感) を超えた Empathy (他者への自己投入) である。世界人権宣言を補う「人間の義務宣言」起草の動きもここバレンシアから起こった。さらに二〇〇五年、本研究センターが国際交流基金の助成を受け、ユネスコ本部及び国際日本文化研究センターを共催者とし、パリで開催したシンポジウム「文化の多様性と通底の価値」では、ソルボンヌの比較宗教学者オドン・ヴァレ (Odin Vallet, 1947-) が時間論を取り上げ、「ユーラシアの西に直進する時、東に循環する時があった。その二つの分水嶺はイランだ」と指摘して私を驚かせた。彼によれば、循環する時の概念

は輪廻 Samsara を信じるインド特有のものではなく、地球の大部分を覆っていた。しかしパレスティナ・メソポタミアに始まった一つの文明が、やがて西欧に引き継がれ、科学・産業革命後は近代文明と呼ばれるものを生み出し、「中央文明 Central Civilization」として受容されるに及び、その時間論もまた世界を覆いつくすものとなって行ったのである。しかも問題は、このときヴァレが指摘したごとく、この時間の描く直線が水平ではなく、右肩上がりの直線であったことだ。それを推し進めてきたものは何か? それを問う前に、オドン・ヴァレが循環する時に関し、それは実は螺旋形を描いている、と重要な指摘をしたことも記しておきたい。

#### 民主主義の限界

自由と民主主義は現在の世界を律する理念であるが、民主主義には限界があることを最近の二つの出来事が示している。イギリスの国民投票の結果であるEU脱退、つまり翌日から後悔の声の木霊した Brexit。そして同じく投票直後から抗議運動が起こったアメリカの大統領選挙である。この二つの国は民主主義の旗手ではなかったのか? 民主主義国家と言われる国々の議会の方は大丈夫なのか? 代議制民主主義は現在考えうる最良の制度とされるが、その問題は、これまたバレンシアでカナダの宇宙物理学者ユベール・リーヴス (Hubert Reeves,

1932) が指摘したことだが、三〇五年という議員の任期、解散されれば更に短くなるその任期にある。サルは木から落ちてもサルだが、議員は落ちればただの人だから、当選した議員の念頭にあるのは常に次の選挙であり、その選挙には「発展・成長」という言葉を唱えなくては勝てない。なぜなら選挙民の方もその大半が望んでいるのは自分たちの手に届く利益であるからだ。一〇〇〇年どころか一〇〇年後の社会を説く候補者の姿が見当たらない。未来世代の権利は無視される。何故ならいまだ存在しない世代は投票できないからだ。したがって限りなく膨れ上がる負債の返済は先送りにされ、未来世代へとつげが回される。これが民主主義国の実態であり限界である。ほとんど候補者が票に結び付く「成長」というマジックワードにしがみつき、その成長の概念はヘブライズム由来の直線的時間論に立脚するものであること、そしてそこには恐ろしい終末論が隠されていることに気が付くものは居ない。

### 生命圏の破壊

こうして地球はもはや人類の重みに耐えきれないところまできた。人間圏による生命圏 (Biosphere) の破壊が始まっていくのだ。産業革命まえに比べ、気温があと二度上がれば地球環境は取り返しがつかない不可逆点 (I. Rockström [1965]) のいう「Tipping point」に達する。ローマ・クラブが『成長の限界』

という報告書を出した一九七二年、世界人口は四〇億であった。それが今では七四億を超えるに至った。二〇五〇年に九七億に達するという試算もある。人口問題はそのまま地球資源の問題である。人間一人が生きるのにどれだけの地上面積が必要か、というエコロジカル・フットプリントの計算では、現在でも地球一・五個が必要なのである。もし中国やインドといった新興産業国がアメリカ人並みの生活を欲するならば、地球は五個必要である。国連の生物多様性事務局によれば、一九七〇〜二〇〇〇年の間に海陸の生物種の個体数は三〇%減少した。IUCN (国際自然保護連盟) は白サイやジユゴン、トキやパンダ、最近では日本ウナギといった絶滅危惧種として二万二四一三種を指定している。もっと注意すべきは絶滅の速度が加速していることである。自然の淘汰に比べ人為的行為が絶滅の速度を一〇〇倍から一〇〇〇倍に加速していると計算されている。来世紀を待たずに鳥類の一二%、哺乳類の二五%、両生類の三二%が絶滅するとされる。

去る二〇一五年末パリで行われたCOP21は、中国をはじめとする新興国と第三世界が、ぞつて参加し、オバマ (Barack Hussein Obama II, 1961) 大統領 (当時) のアメリカもその責任を認めたことにより、一九九七年の京都議定書を上回る成果を上げたが、二〇一六年に発効したこのパリ条約を真っ先に批准すべきだった日本は完全に出遅れた。地球環境を案じるEU

諸国はもとより、米・中にも遅れをとり、国際場裏での存在感の無さを見せつけた、と言わざるを得ない。「日本が国連で世界をリードできるのは人口問題と環境問題である」とのワイスゼッカー (Richard von Weizsäcker, 1920-2015) 元ドイツ大統領の言葉がむなしく想起される。

アメリカ・ファーストを唱え、石炭等の旧産業 (Rust Belt Industry) の白人労働者に職を取り戻すことを選挙中に約束したトランプ (Donald John Trump, 1946-) 米新大統領は、TPP からの脱退に続き、パリ協定からの離脱を選挙中から公言し、ついにそれを発表したが、それは一九九七年に時の副大統領アル・ゴア (Albert Arnold Gore Jr., 1948-) 氏のおかげで成立した京都議定書から離脱したブッシュ (George Walker Bush, 1946-) 政権を思い出させる。この人は、政敵である前政権の行った合意は認めないと臆面もなく言い放ったのだった。その際にアメリカが浴びた国際的非難はトランプ氏の頭にあるまい。オバマ氏の痕跡を消そうという意図が政策に先行している。しかしながら国としての約束を破るこのような行為を繰り返すならば、現アメリカ政府が非難されるのみならず、ひいてはそれを許すアメリカ国民全体が果たして良心を持った国民なのかと問われることになろう。パリ協定からの脱退は、地球と人類に対する背信行為である。幸いまだこの国に希望が残されているとすれば、それは民主主義には欠かせない三権分立が機

能していること、そして地方分権である。ニューヨークやカリフォルニアなどの九つの州、一二五の都市が "We are still in." 「それでも我々はパリ協定に残る」と表明したことが、一縷の希望である。

#### 自然との離婚

ヨーロッパに起こった一七世紀の科学革命と一八世紀の啓蒙主義は、人間の諸能力の中で理性のみを至上のものとした。主観とはコギト Cogito すなわち考える我のみとなり、他のすべては客体となった。我々の身体もその一部である自然は非生命化され人間のための〈資源〉となった。言い換えればこのとき、人間は自然と離婚したのである。更に言い換えれば、そのとき人間はエデンの園で蛇が予言したごとく「神のごとく」になったのである。デカルト (René Descartes, 1596-1650) の目は、世界を操作すべき「対象」とした神の目であった (図2)。

三・一一の直後私と対談したオーギュスタン・ベルク (Augustin Berque, 1942-) は「そのとき人間は存在の半分を失った」とこの出来事を表現している。その空虚さを満たさんとしたのがあくなき所有への欲望である。したがって今われわれは所有の文明を生きている。あくなき所有の欲求が世界的な紛争の火種となっている。それは実はわれわれが自らの存在をすり減らしている、ということだ。なぜならガブリエル・マルセ

## デカルトの目

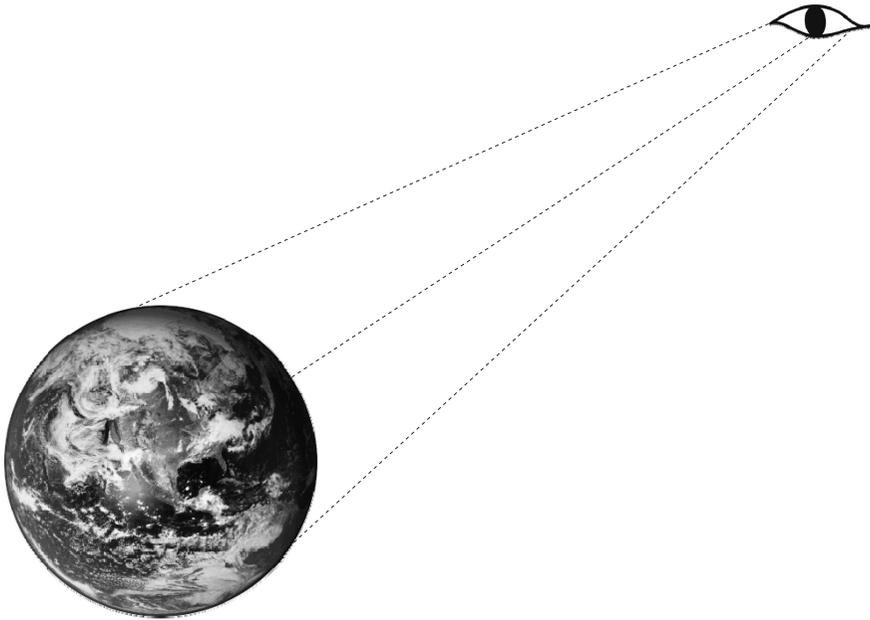


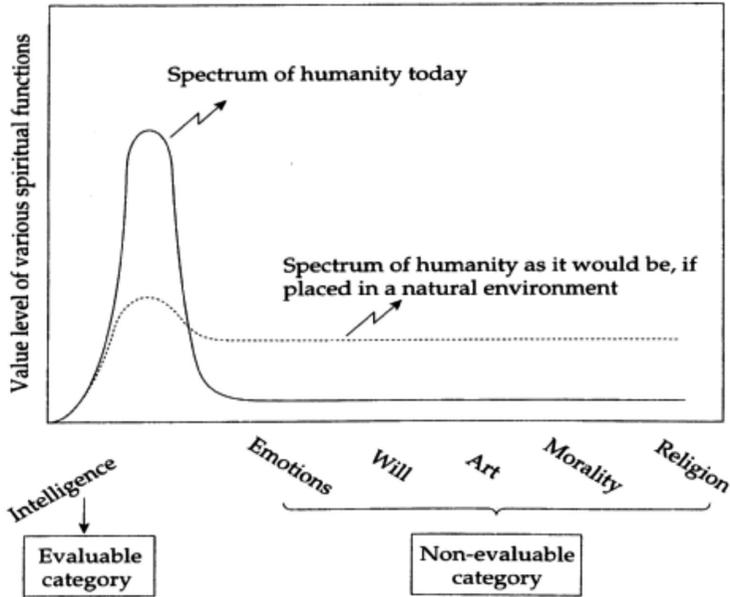
図2

ル (Gabriel Marcel, 1889-1973) がいみじくも示した通り、存在 (être) と所有 (avoir) は反比例する関係にあるからだ。私はこの現象を「精神の砂漠化」と呼んできた。そしてそれこそが地球の砂漠化の真因である、と。

理性を神とするフランスにあつて、ノーベル生理学・医学賞のアレキシス・カレル (Alexis Carrel, 1873-1944) は二〇世紀前半、人間の諸能力の現在のランキングと、もし自然と共生していたら、とする彼独自のランキング図 (図3) を描いた。感情・意志・芸術・道徳性・宗教が現在より高く評価されるべきだという (点線があるべき評価値を示す)。彼はそのためにも人文科学研究所の設立を願ったが、時あたかも第二次大戦のさなかで、その相手はヴィシー政権であったため、残念ながら戦後、カレルの提案は葬り去られた。

かけがえない地球が人類によって破滅しないためには、所有の文化による成長神話を止めなくてはならない。今は「脱・成長」あるいは「ポスト・成長」を語らねばならない時だ。人に熟年という言葉が与えられるように、人類文明もまた、シュペンゲラー (Oswald Spengler, 1880-1936) やトインビーが描いた線のように、熟年に達しているのであり、定常化を考え、右肩上がりの直線的時間論から脱却すべき時が来ているのだ。今日我々に与えられた課題は、三%の人が地上の半分の富を独占するという極端な格差社会を生み出す所有の文化、環境破壊

Fig.1 Unbalanced tendency of value system appearing in humanity today



©Alexis Carrel

図 3

の元凶たる市場原理主義は根本的に見直されなければならない。  
い。

### 科学と文化の乖離

自然と離婚することによって、一九世紀から二〇世紀の前半にかけて頂点に達した機械論的科学主義は、研究対象を観察者の外に置く主客二元論 Dualism であった。それは今では古典的科学と呼ばれるものであるが、それを支えたのが一八世紀西欧を覆った啓蒙主義である。そのとき理性はまさに新しい女神となり、人間の「感性」やそれまでキリスト教信仰を支えてきた「霊性」は下位に位置づけられた。ましてや植民地の「未開人」すなわち理性を完全に使えない人間が生きていたアニミズムは最下位に置かれた。この現象は絶えず戦勝国のナラティヴによって書かれてきた歴史観にも似ている。一九世紀には西列強によってこのように民族の格付けが行われたのだが、それに異を唱えるものはいなかった。

しかし、このような格付けには歴史的背景があった、と知らねばならない。実はキリスト教神学の真理はルネサンス以来勃興してきた自然科学の真理とは相いれないものであったため、ヨーロッパは数世紀にわたってその矛盾を、「真理は科学・倫理は教会」という「棲み分け」すなわち二重真理説で切り抜けてきたのだ。それ故この熾烈な闘いがついに科学の勝利で決着

したとき、今までの無理な棲み分けへの反動として、この地には、すべてを「科学オンリー」でみるという科学至上主義の動きが起ったのであった。科学はまさしくキリスト教圏独特のこの闘争史の故に Value free (価値を問わず) 倫理とは別次元のもの) となったのである。この現象は実は他の文明圏では見られない。他の文明圏、特にアジア大陸の文明では真理とは絶えず倫理を伴うものであった。

### シルクロードの心

西欧に発した科学主義とそれから派生した産業革命は、確かに人間の福祉を向上し生活を変えた。物質文明は飛躍的に伸びた。そしてほぼ同時に従来の Nation (民族) ならぬ Nation-State (国民国家) という考え方が生まれる。Sovereignty (主権国家) という概念が生まれる。これらの現象はすべて「所有の文明」の所産である。内政干渉を排し、どの土地をどの民族が所有するのが国境問題となり、戦争が国境を巡って頻発するようになる。ユーラシアの東西を結び西暦前二世紀からほぼ一〇〇〇年続いたシルクロード交易の時代、重要なのは「面」ではなく、「点」すなわち都市と「線」すなわち道であったのだ。

私が一九八八年からユネスコの正規事業として実施した Integral Study of Silk roads, Roads of Dialogue (シルクロード…

対話の道総合調査) において、私自身が引き出した「シルクロードの心」ともいえるべき結論は次の三点に集約される。

- (一) 善きものを求めて行った。売りに行ったのではない。
  - (二) 分かち合いを知っていた。独占ではなかった。
  - (三) 国際的行為であった。単独民族のものではなかった。
- 一九九一年一月一六日、湾岸戦争が急を告げる中、オマーンのカブース (Qabus bin Saïd Al Saïd, 1940-) 国王が UNESCO のこの調査計画のために供与してくれた護衛艦フルク・アル・サラマの艦上で、ユネスコ代表として私が行った特別講演 Silk Roads and Peace は、この三つのシルクロード交易の精神が失われたことが戦争の世紀を開いた、とするものであった。

この一大計画を発足するに当たり行われた記者会見で、私はブルースト (Marcel Proust, 1871-1922) の言葉を引いた。「我々はへ失われた時を求めてへ船出する。その時とはすべての民族が他民族の文化に敬意を払っていた時、「互敬」 Mutual Respect が存在した時代のことである」。AFP 通信はこの *Ala recherche du temps perdu* という言葉をトップニュースとして伝えたのだった。

シルクロード全盛期の開かれた世紀、八世紀を例に取れば、国境問題も異民族問題も見あたらぬ。世界各地に長安やコンスタンチノープルのような、文化センターとしての都市が存在していた。奈良もそうである。聖武天皇 (七〇一―七五六) の

御代、大和最大の太夫の開眼式をインド僧ボディ・セーナ (Bodhisena, 704-760) が取り仕切った時代である。そして実はシルクロード交易のこの三つの特徴の正反対の行為が行われるようになったのは大航海時代、特に各国の東インド会社の出現以来であり、それが独占と排他という将来の戦争の文化を生んで行くのである。一七世紀には所有戦争である近代戦争の原型が造られ、一九世紀には、アジア・アフリカ・アメリカのすべてが所有の対象となった。植民地主義と呼ばれるものの本質は所有の文明である。

#### 文化は内に向かい、文明は外に向かう

文化とは一民族の魂が秘めるエートス Ethos であり、文明とはそれを発揚する装置 Instrument である。ITに当てはめて言えばソフトとハードウェアの関係にある。後者は絶えず世界基準となり他を消し去る可能性を秘めているため各国とも自国の文明をいち早く世界基準にするべく激しい戦いを繰り返す。西欧発の装置すなわち所有の文明は「近代文明」と呼ばれる世界を覆った。その近代文明を「坂の上の雲」のように仰ぎ見た明治期の日本はその道を駆け上がったのであった。

ところが、私にとつては目から鱗が落ちる経験があった。初めてパリに留学したころ、ミシェル・ランドム (Michel Random, 1933-2008) という知識人がカフェ・テラスで語って

くれたことだ。「日本は伝統を維持している。西欧は伝統を失った社会だ」。すると黒船に慌てふためき鹿鳴館の開国を行った日本人が見ていた西欧とは本来の西欧ではなく、日本に姿を現すそのわずか前に実体変化を行っていた西欧であったのだ。つまり明治の日本人が見た「坂の上の白い雲」は実は直前に変形した雲であったとは気づかなかつたということだ。言い換えれば日本は西欧に学ぶとしながら、本来の西欧をわが物とはしていなかつた、ということになる。

#### 西欧の良識——バランス

このように聖俗の葛藤を経たのち現在問題とされる物質主義的近代文明を築いた西欧であるが、それは自己批判も厭わない強靱な知性を持つ文明でもあつたことも認めねば公平であるまい。ここでは人間性が一方に偏れば必ずその反対の動きが現れ、均衡を保とうとする動きがみられる。理性を謳歌する男性原理の啓蒙主義の時代にすでに女性原理たるロマン主義が生まれる。パロック芸術が生まれる。時計の振り子のように理性と感性のバランスを回復する動きが観察される。湯川秀樹はいみじくも「自然は曲線を創り、人間は直線を創る」と喝破したが、バルセロナに見るガウディのサグラダファミリア大聖堂は曲線のみで直線が無い。文明一元論に基づく盲目的進歩・成長の概念に対し、同じ科学の場からヘッケル (Ernst Haeckel,

1834-1919) のエロロジという語が生まれる。ユネスコの場で「文化の多様性」の重要性を強調したのもアジア・アフリカ諸国ではなく、フランスやカナダの代表であった。これらの人々は、今まで軽視されてきた先住民の知恵に存在意義を認め、文化の多様性こそが人類の遺産であるという。そしてそれは二〇〇一年、ユネスコにより「文化の多様性に関する世界宣言」となった。その直前、マイヨール (Federico Mayor Zaragoza, 1934-) やゴルバチョフ (Mikhail Sergeevich Gorbachev, 1931-) といった西欧有識者が主導しユネスコの場へ二〇〇〇年に採択された「地球憲章」Earth Charter も今までの人間中心主義を脱して生命共同体への敬意と配慮を示している。

二〇〇一年一〇月、すなわち九・一一事件の直後、ユネスコが満場一致で採択した「文化の多様性に関する世界宣言」は、世界人権宣言に次ぐ重要な宣言と評価されたものであるが、この第一条に明記された「文化の多様性は、自然界に生物多様性が必要なのと全く同様に、人類に不可欠である」との認識は、一九九五年東京国連大学で行われたユネスコ創立五〇周年記念シンポジウムにおけるジャック・イヴ・クストーの基調講演に由来している。彼はカリブソ号を駆使し、世界の五大陸、七つの海を調査するうちに、生物種の多いところでは生態系が強く、種の数が少ないところでは生態系が脆いことを発見したの

であった。そして鶴見和子 (一九一八—二〇〇六) を感動で身震いさせた言葉がそれに続いたのだ。

「その法則は文化にも当てはまる！」

#### ホールネスの認知

科学と伝統文化の乖離に警鐘を鳴らしたのも、神学者や哲学者ではなく、実はユネスコで筆者自身が発足させた「科学と文化の対話」シンポジウム・シリーズに参加した西欧の科学者たちであった。彼らは「科学と伝統文化は深淵で隔てられ相容れない」といういわれなき思い込みに重大な反省を促している。

特に一九九五年、国連大学で開催されたユネスコ創立五〇周年記念シンポジウム「科学と文化：未来への共通の道」が残した「東京からのメッセージ」Message from Tokyo は、量子物理学を初めとする最先端の科学者であるパネリスト自身が起草したものであったため、優れた内容を含むものとなっている。そこには、今や Holistic (全人的) なアプローチによる新しい啓蒙の時代が始まっており、その存在認識によれば、「全体は部分に包含され、部分全体に行き渡っている (the enfoldment of the whole in its parts and the distribution of the parts over the whole)」との重要な記述がある。この言葉を私は「全は個に、個は全に遍照する」と訳したが、この自然科学の側からの重要な存在認識は華嚴の「一切即多、多即一切」そのものであり、

更に一なる神が万有に顕現するとするイスラームのタウヒードにも通じるものである。(海のシルクロードを通じてイスラームが到達した泉州のモスク、清心寺には「萬殊一本」の扁額がかかっている。)板垣雄三(一九三一—)氏によれば、そのタウヒードの觀念の底には古代エジプトに遡る「ヘン・カイ・パン」(一にして全)の思想があるという。この一連の科学と文化の対話シンポジウムから、存在論としてのホールネス Wholeness という言葉が生まれた。これはホリスティックなアプローチという学術的方法と連動している。それは細分化した科学知 Scientia ではなく、統合知 Sapientia を志向するものである。

科学革命以来の二元論を否定するこの重要な言明を論理学の側面からみれば、刮目すべきは、近代科学文明のネックであったアリストテレス (Aristoteles, 前384-前322) 以来の「排中律」が最先端の科学では破られている、ということである。排中律はおよそすべてを対象化する二元論に立脚した論理であり、我々自身がその中に包含された大自然をも対象化した近代科学の立場と一致していたのだが、二〇世紀に生まれたアインシュタイン (Albert Einstein, 1879-1955) の相対性理論をはじめとした理論物理学は、デカルトのコギト以来抽象化されてきた、すなわち実在から abstract された観察者を実在の舞台に引き戻した、といつてよい。ニールス・ボア (Niels Bohr, 1885-

1962) やハイゼンベルク (Werner Heisenberg, 1901-1976) の表現によれば In the great drama of existence we ourselves are both actors and spectators 「実在という壮大なドラマにおいては、我々自身が同時に役者であり観客である」のである。テオリアという抽象的観客の立場は存在しない。観測者がそこに居るということ自体が存在を動かすのである。この存在認識から「包中律」という新しい論理が可能になることが先述のロカルノでのシンポジウムでは明らかにされた。包中律によって初めて「色即是空、空即是色」も「絶対矛盾的自己同一」も真理認識として可能になるのである。包中律はホリスティック存在論を支える論理である。

#### 循環の思想

最近問題とされる言葉に Sustainability がある。維持可能性と訳されているが、一体何を維持するのか? それを相変わらず産業成長と解する動きが第三世界には顕著である。だが、それを続ければ、現在の消費水準でも地球一個半が必要な人類のエネルギー消費は、ジャック・イヴ・クストーが警告したように、人類そのものを間もなく絶滅危惧種のリストに追加することになるであろう。いま必要なのは成長神話の虚構を世界の指導者が認識することだ。人が大自然の中にあるとき、時間は直進せず循環する、と知ることだ。「吾唯足るを知る」という古

「吾唯足るを知る」  
 (竜安寺の「つくばい」)



図 4

人の知恵を蘇らせることだ。この転換は決して理性主義の否定ではない。その反対の新しい理性主義の誕生であり、失われていた全人的な理性を取り戻すことなのだ。個人の主観を文字通り抽象 abstract し、自然を所有物として客体化する理性ではなく、自然の中にあつて、人間本来の感性・霊性、そして自然の声と共振する理性を再発見することである。

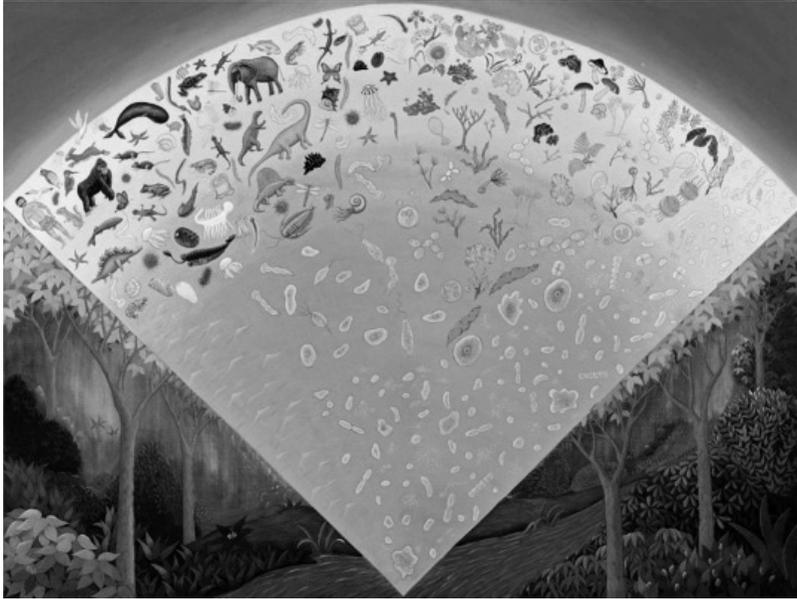
循環の思想は実は地球上に偏在していた。法螺貝（カラコル）を尊び、金星の循環に時を見たマヤ文明、ナイルと共に生き、太陽の再生を神としたエジプト文明、時が円相を描く時輪曼荼羅（カーラ・チャクラ・マンダラ）を持つチベット文明、

妖しくも美しい曲線の文様にあふれたケルト文明、優しく海の母性を謳ったエーゲ海文明、更に優れてそれらに呼応するのは、広く西太平洋の豊穡の三角地帯 West Pacific Crescent of Fertility が生きてきた水の循環の思想、水に「大いなるいのちの循環」を見る文明である。その一端に位置した日本文明はその表現様式を極度に洗練させてきた。この循環の思想は「とこわか」の思想」とも表現されよう。

人類の篡奪により限界に達した「かけがえない地球」に住む人類は、今やセルジュ・ラトゥーシユ (Serge Latouche, 1940-) の「脱・成長」(Décroissance)、広井良典 (一九六一-) のいう「定常化↓ポスト成長」に向かわなくてはならない。そのためには、人間を自然に対峙する人本主義、コギトの生み出した主客二分論 (Dualism) の打破こそが最大の課題である。人は自然の覇者ではなく、自然の一部である。すべての命は繋がっている。人類は人である前にまず生類として認識されるべきである。一木一草、朝露の一滴に神は宿る。その存在の実相がホールネスである。

#### 宇宙的いのち

「ともいき」と共に日本に生まれた思想に「とこわか」がある。我々がいま世界に発信すべきは、とこ若の思想、すなわち循環と再生の思想ではないのか、と私は思う。哲学者ガブリエ



【生命誌絵巻】 協力：団まりな 画：橋本律子  
中村桂子「生命誌—生命という知」より

図5

ル・マルセルは伊勢神宮を訪れた際、「ここでは人間は自然ともコミュニオン（聖体拝受的合体）ができることを知った」と私に語ってくれた。同じくアンドレ・マルロー (Andre Malraux, 1901-1976) は「伊勢神宮はピラミッドよりも、カテドラルよりも、雄弁に永遠を語る」と述懐している。

神宮のすべてが二〇年ごとに白木で蘇る、その式年遷宮が語るもの、それは成長ではなく、いのちの継承であり、再生である。そしてそれが世界に通じるものであることは、伊勢を訪れたアーノルド・トインビーが残した言葉に明らかである。

「この聖なる地で、私はすべての宗教に通底する一なるものを感じる」

この稿を終えるに当たって、暇に浮かぶのは、わが師西谷啓治（一九〇〇—一九九〇）先生の姿である。師が求めていたもの、それは「生の根源への全人的回帰」であった。「主客未分」よりも「父母未生」という表現を先生は好まれたが、宇宙的いのちの深みへの回帰が、宗教を超えた哲学を生んだ。師は西欧哲学の不動の価値として Sein（静的存在）があり、その対極に否定概念として Nichtsein（存在の否定＝虚無）が置かれたこと、それがプラトン・キリスト教的存在論の基礎となっていたことを指摘したうえで、本来の存在は空 Nichts であり、それがそのまま Werden（生成）であり、いのちである、と説いたのであった。

また私がこころ動かされるものは、詩人石牟礼道子（一九二七—）さんの生きざまである。水俣病を追及し、「不知火」の海に「苦界浄土」を見た石牟礼さんは、人類を超え「生類しやうるいに寄り添って生きる」詩人である。生きとし生けるものが三九億年前の生命の誕生から連続として続いた一筋の「いのち」のいとなみであり、多様化するわち進歩は相互扶助の歩みにほかならず、すべてがすべて結び合っていることを、その魂で感得した詩人である。この万有の相互扶助を宇宙の法（Network of Interdependence）としたのが廣池千九郎（一八六六—一九三八）であった。

それはまた私の敬愛する鶴見和子さんにも通じる。鶴見さんは自分が至りついた曼荼羅の思想をこのように語ってくれた。

「異なるものが、異なるままに、互いに補い合い、助け合って、共に生きる道」

存在のホールネス（全一性）、すなわち宇宙的いのちを、一〇代半ばのつぶらな瞳で見て取った少女がいた。不幸にも夭折した長州の金子みすずである。その「蜂と神さま」をもってこの稿のおわりに代えたい。

蜂はお花のなかに、  
お花はお庭のなかに、  
お庭は土塀のなかに、  
土塀は町のなかに、  
町は日本のなかに、  
日本は世界のなかに、  
世界は神さまのなかに。  
さうして、さうして、神さまは、  
小さな 蜂のなかに。

（編集者註：本稿は、平成二九年六月七日に開催された、道徳科学研究センターの「現代倫理道德研究会」の内容に加筆・修正を加えたものである。）